島の塔頭（タッチュー）と電照菊

国梓としひで

ぼくはついに念願だった日本に来ることができた。

案内された二階の部屋に入ると、陽に焼けた古い畳の上に真新しいスチール製のパイプベッドと折りたたみ机が置かれてあった。サッシ窓に近づくと、遠く、サトウキビ畑の広がりの中に尖がり帽子に似た岩山が突端を空に突き上げ、その遥か後方には東シナ海の水平線が揺らいで見えた。岩山は通称タッチューと呼ばれ、百渡（ももと）島のシンボルだと聞いていたけど、一目見てぼくはすぐに故郷の森の中にひっそりと佇んでいる仏塔（パヤー）に似てると思った。

目を手前に移すと、野菜畑や牧草地やビニールハウスがブロックパズルのピースのように並んでいる。生まれ育ったミャンマー（旧ビルマ）の田舎と緑の鮮やかさは同じだけれ

ど、比べものにならないくらい自然が整然としていると感じられる。それはある種のこの国の、この島の豊かさなのかも知れない。

ヤンゴン（ミャンマーの旧首都）から東京を経由して沖縄本島那覇までの約一五時間の飛行と百渡島までのフェリーでの約一時間の航行は、初めてのことで不安と希望で興奮してしまい、とてもじゃないけど心身ともに気が休まらなかった。しかし、目の前の島の景色を見ていると、ホッと心なしか気持ちが落ち着いてくる。

（百渡島か、長閑（のどか）でいいところだなア）

爽やかな風が一定のリズムを刻みながら頬に当たる。潮気を含んだ草、ちょっとした堆肥の匂いが鼻を揺する。幻想的でまるで夢の中にいるようで一種の睡眠状態になってきた。

就職先が沖縄だと派遣会社の面接官に聞かされた時のことを思い出した。

「オキナワって？　台湾に近いあの島です

か？」

と聞き直し、正直、落胆してしまった。沖縄とミャンマーでは温暖な地方という点で変わらない気がしたからだ。出来る事なら日本の北、寒冷地の農家で稲作か果樹を勉強したかったし、ついでに白銀の世界――雪景色とやらを体験したいと思っていたが、世の中はそう思い通りにはいかない。受け入れ先は沖縄の菊（ガンダマー）を栽培している花卉（かき）農家だと言う。しかも、オキナワの離島で菊――初めて聞く組み合わせに一瞬戸惑ってしまった。

ヤンゴンの日本語学校で二年間学んで日常会話を中心とした語学試験にパスし、しかも、外国人農業技能実習生として日本の農業のことを勉強しながら就職準備をしてきたが、その努力も少しだけ無駄骨だった気がした。

しかし、今更、断ることもできず「はい、はい、お願いします」と返事をした。

月給は日本円で十四万円。そのうちの半分を実家に仕送りしても十分にやっていける。

ぼくの住む田舎での初任給が二〇万チャット（日本円換算で約二万円）余りで金銭的な価値を比較すると約一〇倍の差になる。この機会を逃すわけにはいかなかったのだ。

まずは沖縄でもどこでも日本であればいい、その後は東京そして北の方へ行ければ……チョッとだけ、よこしまな考えが頭を過っ（よぎ）てしまった。

面接官に紹介された稲嶺晃（いなみねあきら）さんは、始めて農業技能実習生を受け入れるという農家の方だった。年齢は三〇代後半で、日焼けした顔に、つるつるの頭、笑うと目尻が下がり、思わずお寺（パゴダ）の僧侶（ボンジー）が現れたかと思った。

稲嶺さんは知識不足の外国人のぼくに沖縄の地でしかもその離島で、風土に根ざした菊を栽培することの意義を熱心に語った。

自分たちが作った菊を多くの人々に提供するということは、祖先を敬い霊を供養するために献花する日本の習慣を大切に守っていくことに繋がっている――それは仏教と儒教

を併せ持つ文化の奥深さの象徴だとのこと――つまりは真心を世の人々に届ける仕事をしているのだと胸を張った。

恐らく稲嶺さんは、日本と同じ仏教を信じるミャンマーも祖先崇拝の習慣があると勘違いしていたのだろう。仏教国とはいえ、ぼくらの国は祖先を敬う墓も仏壇もないから菊を献花する習慣はない。ただ、お寺の卒塔婆（ストゥーバ）や家にある仏像に色とりどりの花を供えてお祈（ペヤシコウ）りをすることはあるけど……。

それに、沖縄の離島で菊を栽培する意義を問われても、ぼくにはよく分からない。生まれてこの方、海を渡ったこともなければ、ましてやその島々の存在など意識したことなどなかった。とは言え、ぼくらの国にも離島はある。南方のアンダマン海に浮かぶメルギー諸島が観光地で有名だけど、そこに住む人たちはぼくらとは違う海洋民族ということもあり、そこでの生活や習慣、風景など、正直、ほとんど関心がないのだ。

しかし、ぼくは稲嶺さんの話に戸惑いながらも、ある意味感動を覚えていた。それは話の内容というよりも、したり顔で喋り続けるその姿がカッコいいと思えたからだ。今思えば、そうなんだ、大袈裟かもしれないけれど、稲嶺さんの背中から後光が射していた。いくつもの大輪の菊が光輝いているように見えたんだ。

ほんの少しだけ眠った気がした。部屋の中にまで西日が差し込み、前庭の方から人々の声が聞こえ、懐かしい夜の屋台で嗅ぐ、胡椒の効いた焼き肉の香ばしい香りがしてきた。

歓迎パーティーの準備が始まっていた。民族衣装のロンジー（巻きスカート）を着て、時間通り玄関脇の庭に出てみると、すでに一〇名程の人たちが二つの会議用テーブルを挟んで集まっていた。後で知ったことだけれど稲嶺さんの家族とその従業員たちだった。テーブルの上にはビールやワイン、そしてオー

ドブル料理が並び、少し離れたところにはバーベキューコーナーがあり、ボーイスカウトのキャンプファイヤーのような雰囲気だった。

「これから私たちの仕事を手伝ってくれるタント君です。皆んな、よろしくね」

片手で缶ビールを持った稲嶺さんがぼくを紹介すると拍手が起こった。

「わたし、名前はカウン・ミヤー・タントです……」

稲嶺さんの隣に座るぼくははにかみながらも両手を合わせ礼儀正しくお辞儀をした。ぼくらの国ではほとんどがそのような挨拶――元々は僧侶が托鉢（ソンカン）の際、食事を貰う時にする仕草――をする。

ぼくを「タント」の愛称で呼ぶことにしようと稲嶺さんが提案すると、

「タント、いい響きだわ。いいんじゃない。タント君よろしくね」

真向かいにいた奥さんが周囲を見回しながら無邪気なほど明るい声で言った。

「は、はい、お願いします」

ぼくはくすぐったい気分を感じながらも素直に答えた。

「タントってどこかで聞いた名前ですけど、えーっと、誰でしたっけ？」

従業員の一人が思わず口にした。

「そんな人いたっけ？　アウンサン・スーチーさんなら知ってるけど」

稲嶺さんが答えると、直ぐに奥さんの隣に座る老人が口を挟んだ。

「ウ・タントと言う国連事務総長がいたね。世界の平和に貢献した偉い人だよ」

入れ歯のせいか言葉が水を啜るように聞こえる。

「ほー、さすが物知りの清助（せいすけ）おじいですね」

と言って奥さんは清助おじいと呼ばれる老人を持ち上げる。

「清助おじいに従業員のひさしさんと泰男（やすお）さん、近所の信子（のぶこ）さん、そして妻のトキ子と息子の亮（りょう）です」

稲嶺さんはじゅんぐりに皆を紹介し、続けて

「ここ百渡花卉農園のモットーは……愛する人たちに真心と菊を届けることです」

ぼくの方を何度も見ながら演説口調で言った。

「あれ、まあー。晃さんったら、偉そうに自慢しよるさあー」

破顔一笑、トキ子さんの言葉に

「まあー、いいから、いいから」

照れ笑いの稲嶺さんを横目に清助おじいはニタッと笑った。

「さぁーて、これから食事タイム！」

稲嶺さんの元気な声を合図に、炭火で焼き上がったステーキ肉がテーブルに運ばれてきた。

バーベキューパーティーの話題は、ミャンマーの観光地や風俗、習慣の違いなどに集中した。周囲の人たちが質問するも、その受け答えの半分は清助おじいが引き受けてくれた。

稲嶺さんによると、清助おじいは戦時中ビルマにいたとのことで、いろんなことをよく知っていた。特に、ぼくが着ているロンジーに話が移ると、自慢げにその着け方をトキ子さんに伝授したりしていた。

「タントの出身地はどこなの？　ヤンゴンかね」

清助おじいが直接言葉をかけてきたのは、ぼくがバーベキューコーナーにステーキ肉を取りに行く途中、側を通りかかった時だった。

「ヤンゴンから遠い、モン州から来ました」

と、ぼくが答えると

「ほぉー、モン州ね。南のタイに近いところだ」

「はい、ムドンという田舎です」

「え、ムドン？」

清助おじいは一瞬身を乗り出すと、掠れた低い声でボソッと言った。先ほどまでの得意げな顔つきから急に事有りげな表情に変わった。

ぼくは思いがけず、清助おじいの口を衝いて出た言葉に正直驚いた。ぼくの生まれ育ったムドンは観光地でもないし、外国人には馴染みの薄い土地だと思っていたからだ。

「ムドンを知ってるんですか？」

即座にぼくが聞き直すと

「ああー、昔、その辺にいたことあったなあ……」

清助おじいはひっそりと目線を上に向け、何かを思い出そうとしているかのような態度を見せた後、やおら立ち上がった。

「私はこれで退散するよ、朝が早いからね。タント、明日から頑張ってね。じゃー」

と言い残し、よたよたとおぼつかない足取りでぼくの側から離れに戻っていた。

その後ろ姿を目で追いながら、ムドンの一言に直ぐに反応した清助おじいの挙動に何故かしら深い訳があるような気がして、ぼくは少しだけ緊張してしまった。

「タント君の健康と活躍を願って、乾杯！」

稲嶺さんの締めの言葉でバーベキューパーティーはお開きに、ぼくの日本での最初の夜――それはとても楽しく得(え)も言われぬ幸せな時間だった。

翌朝、ぼくは仕事の前に、稲嶺さんの運転する軽トラックで百渡島を案内してもらうことになった。稲嶺さんによると、島は東西に細長いポテトチップスに似た周辺約二〇キロの平坦な台地で、中央付近に約二〇〇メートルのタッチューが聳(そび)える。唯一の集落である百渡部落から海岸線に沿ってくるりと一周道路が島を囲っていると言う。

ぼくたちは、はじめに島の中央付近にあるタッチューの展望台に登り、島を一望。タッチューとは塔頭と書いて仏塔のことだと稲嶺さんから岩山の由来を教えてもらい、その後は一周道路を時計回りに二時間ほどのドライブをして集落近くにある百渡花卉農園に着いた。

農園の周辺は牧草地やサトウキビ畑が広がり、ここだけが背丈ほどの高さの鉄線で囲まれていた。金網の入り口を入ると、すぐ脇にビニールハウスと小さなバラック小屋があり、その先には何も植えられていない裸地のままの畑が広がっていた。先ほど登ったタッチューの尖った姿が映像から抜け出てきたかのように遠くに見える。サッカー場の半分ほどの広さの畑は大きく四つに区切られ、その一つひとつには幅一メートル、長さ二〇メートルにわたって土を盛り上げた畝がいくつも作られていた。

バラック小屋で作業服に着替えた後、稲嶺さんについてビニールハウスの中に入ると、奥さんと二人の従業員さんが既に仕事を始めていた。

「おは、よう、ございます」

ぼくの挨拶に

「ああ、おはよう。タント君」

「昨夜は眠れたね？」

次々に声がかかった。

目の前のビニールシートの上に腕の長さ程の菊の枝葉が野積みにされていた。

「今から挿し穂作りをやってもらおうかなあ。この親株を苗床に育てて畑に移す。菊栽培はこの挿し穂つくりから始まるんだよ」

稲嶺さんはそう言うと、剪定(せんてい)バサミを手に取り、手馴れた仕草で素早く枝葉を切り始めた。

「やってごらん。上の葉っぱから、そうだねー、五センチのところで、葉っぱを三から四枚残してスパッと切る。どうだい簡単だろー」

ぼくはイスに座り、菊の枝葉を一本ずつ手に取り、稲嶺さんの動きを横目で見ながら慎重に作業を開始した。

挿し穂作りから一ヶ月が経ち、今日から畑への定植作業が始まっていた。

既にいくつもの畝(うね)にはマルチシート（黒色のビニール）が張られ、見るからに畑一面、

縦縞模様の様相になっていた。一つひとつのマルチシートの尾根には二本の糸が張られ、それに沿って菊苗を約一〇センチ間隔（株間）ごとに植え付けていく。全部で数千本の菊苗を稲嶺さんはじめぼくたち全員で行う。こればっかりは機械化というわけにはいかず、そのため作業は正確で機敏な動きが求められる。稲嶺さんや従業員さんたちは慣れたもので作業は早い。

「タント。縦に真っ直ぐ。深く差し込んでね」

突然、ぼくの肩越しから声がして振り返ると、いつの間にそこにいたのか、清助おじいが立っていた。

「ああー、はい」

ぼくは一瞬ひるんでしまった。

「慌てずに、こうするんだよ。見てなさい」

清助おじいは諭すようにぼくに言い、両膝を地面につけ前屈みの姿勢になるや、「よいしょ、よいしょ」と声を出しながら挿し穂を植え始めた。中指の先をマルチシートに押し込

み、穴を開ける。毛根に土が残ったままの挿し穂を五本の指でマルチシートの破けた穴に挿し込んでいく。高齢者とは思えない手際のよさにぼくは驚くと同時に感心してしまった。

「浅いと根が浮いてきて倒れちゃう。逆に挿し込みすぎると、成長が遅くなってしまうんだよ……根の深さはこれぐらいね」

清助おじいは目を細めながらぼくに言う。

「どうだい、出来そうかい？」

「……はい」

ぼくが神妙に返事をすると、清助おじいはにっこりと笑う。

「初めてなんだから、慌てなくていいからね。ゆっくりやればいいよ」

清助おじいはそう言うと、ゆっくり立ち上がりバラック小屋に向かって歩いて行った。

ぼくは清助おじいの手取り足取りの教えを請うことで気分は次第に軽くなり、焦らず気取らずに作業ができるようになった。

清助おじいは庭を隔てた木造の離れに一人で住んでいた。二階のぼくの部屋の窓からは離れの赤瓦の屋根が見え、突き出た濡れ縁に隠れるように坪庭があった。もともとはこの建物に清助おじいと稲嶺さん夫婦が住んでいたのだそうで、一〇年ほど前に同じ敷地内に鉄筋コンクリートの二階建てを作り、そこに稲嶺さん家族が移ったという。

清助おじいを最初見た時、稲嶺さんとは随分年の離れたお父さんだなーと思ったけれど、祖父さんだと聞かされて納得した。

七三年前の太平洋戦争では兵士としてぼくの国のミャンマーやタイなど東南アジアの戦地にいたとのことで、戦後沖縄に戻り、菊栽培を始めて約五〇年経つと言う。それからすると、年齢は恐らく九〇半ばぐらいでかなりの高齢のはずだ。がしかし、少しずつ物忘れが多くなってきていることを除けば、皺やシミはそれほど目立たないし、八〇代と言っても通じる。

詳しいことは知らないけど、稲嶺さんの両親が三〇年ほど前に相次いで病気で亡くなってからは、当時、小学生だった稲嶺さんの面倒を父親代わりにみてきたという。

定植作業から暫く経った日曜日の夕刻、ぼくは部屋の机の上でミャンマーにいる家族宛にメールを打っていた。アウンサン・スーチーさんの率いる国民民主連盟（ＮＬＤ）と国軍のことが沖縄のテレビ局で放映されていたので、その話題を送信していた。

故郷のことを思い出しながら、ふと窓の外を覗くと、離れの濡れ縁にぽつんと座る清助おじいの姿が見えた。遠くに見えるサトウキビ畑に顔が向いており、その足元には西日が迫っていた。

庇（ひさし）の陰から、手が伸びて「こっちにおいで」と、手招きしているような気がして、無性に話がしたくなった。

ぼくは意を決して離れに行き、清助おじい

に声をかけた。
「おじいさん、お元気ですか？」
「ああ、タント。さあ、ここにおいで……」
清助おじいはポンポンと左手で床を軽く叩きながら、側に座るように促してくれた。
「ところでミャンマーはどうね？　国内紛争は続きそうかね？」
ぼくが腰を下ろすと同時に質問が飛んできた。昨夜のテレビ番組の放映を見てのことかと思った。
「え、いや、大丈夫だと思います。今のところは……」
唐突な質問にどう答えていいか、戸惑いながらもぼくは心底、希望的な観測を言った。
テレビでは、ミャンマー国軍のトップ（将軍）が日本のジャーナリストのインタビューに答え「経済の低迷、地方政治の混乱、汚職などは今の政府が悪い」などとして、アウンサン・スーチーさんを再び拘束するかのような発言をしていた。

ぼくの国ミャンマーは、今から七二年前の一九四八年にイギリスから独立したが、未だに政治経済ともに問題が山積していて世情は混沌としている。五年前、長かった軍事政権に変わり民主的な総選挙でアウンサン・スーチーさんを中心とした民主政権が誕生したからもう戦争は起こらないと思ったけど、でも悲しいことに地方では未だに民族間の争いは続いている。それに昨日のテレビのように国軍の不穏な動き（クーデター）もある。ぼくが帰国する三、四年後はどうなっているか、とても不安だけれど、これぱかりはぼく一人の力ではどうすることもできないし、どうにもならない。ただただ、平和で穏やかな日々が続くことを願うばかりだ。だから敢えて、清助おじいには「大丈夫です」と返事をした。

「そうかい」

ぼくの国の事情を察してのことか、清助おじいは眉間に皺を寄せながら不安げな表情を見せた。

「ぼくの国に比べて、百渡島って、平和でのどかないい島ですね」

ぼくは正直に言った。この島がうらやましい。ぼくらの国は民族紛争が激しくて戦争ばかり……それに比べ、日本の、この島は戦争とは無縁のように思える。

ところが、清助おじいの返事は意外なものだった。

「今でこそ平和だけどね……でも、この百渡島も七〇年前の戦争では大変だったんだよ。島の半分以上の住民が殺されて、まるで地獄だった」

清助おじいは西日を手のひらで遮るような仕草をしながら静かに言った。

「え、この島でも戦争があったんですか？」

ぼくは信じられなかった。

「ああ、沖縄本島もこの島だけじゃない多くの離島でも、戦争で沢山の人が犠牲になった。戦争は……血で血を洗う戦争は絶対よくないよ」

目の前に日よけ越しになった前栽の彼岸花の花が真っ赤に色づいている。それを見据える清助おじいの目が涙で潤んでいるようにぼくには見えた。

暫くして、ぼくは話題を変えた。

「あのー、パーティーの夜に話していたムドンのことですが……」

「ああー、ムドンはタントの故郷だってね。昔、そこの仏塔（パヤー）に行ったことがあったなあ。だだっ広い野原にとんがり帽子に似た塔がポツンポツンと建っている様はとても美しかった」

清助おじいは懐かしそうな表情を浮かべながら言った。

「ムドンには沢山の仏塔があります。ぼくたちの祈りの場所です。そういえば、百渡島にも仏塔に似た山がありますよね」

「タッチューのことかね。そう、あの山は島の仏塔、私たちの心の拠り所だよ。これまでこの島のいろんな出来事……楽しい行事や悲

しい出来事、全てを見守ってきたんだよ」

ぼくは畑仕事の合間に見るタッチューの姿を思い起こしながら清助おじいの話に聞き入っていた。

もう、すっかり日が暮れて稲嶺さんの家の方から夕飯の匂いがしてきた。

「どうだい、ビールでも飲むかい？」

清助おじいは「よいしょ」とゆっくり腰を上げ、ぼくを手招きした。濡れ縁からぼくは家の中に初めて入った。手前が居間と寝室を繋げた大部屋でその奥が仏間だった。大部屋にはベッドと大きなソファーが置かれ、四方の壁には写真が趣味だとのことで、新聞紙半分ほどのパネル写真がいくつも掛かっていた。

渡された缶ビールを片手にパネル写真を見て回る。その中の一枚にぼくは心を奪われた。

「このモノクロ写真。とてもラーライダー（綺麗）ですね。後方に写ってるのはこの島のタッチューですよね。仏塔のイルミネーション

みたい。ビューティフル！」

「これは電照菊の写真だよ」

自慢げに清助おじいは言った。

「でんしょうぎく？」

「ああ、そうか。まだ見たことないんだね。菊の開花を遅らせるために一斉に電球の光を当てるんだよ」

「これって、菊畑なんですか。すごい！」

太陽の光に替えて電球を使うなんて、日本の農業技術に驚くとともに、その景色のダイナミックさと美しさに魅せられてしまった。

「今、タントが育てている菊畑だよ」

「へー、あの畑がこんな景色に変わるんだ」

あらためて写真を見ると、確かにそれはタッチューと菊畑の風景、かつて稲嶺さんが言ってた別世界そのものだった。

真夜中の菊畑——数百本の裸電球に照らされた枝葉がタッチューを背に夜の闇に浮かんでいた。それはまるで無数の星屑が無重力の宇宙空間で浮遊しているように見える。淡

い光は闇を抜け、地面に落ちながらも蕾に当たって弾け飛ぶ。神々しくて厳(おごそ)か、そんな印象なのだ。

「この景色、何かに似ていると思わないかい？」

清助おじいの口がゆっくりと開いた。

「え、この光？」

ぼくはきょとんとした顔になった。

「ミャンマーの祭り」

「ぼくの国の……ですか？」

はて？　ぼくは暫く考え、もしやと思った。そうダ！　仏塔で行われるダディンジュ（無数の蝋燭を参堂や仏塔に灯す風習）に似てる、そう似てる！　灯祭りともいわれミャンマーの人々にとっては毎年雨季が明けた一〇月頃に行われる年中行事で仏陀に祈りを捧げる祭り。金箔を施したキンキラの仏塔の境内で何百、何千もの蝋燭を立て、光を燈す。僧侶が唱える読経の中でのその光景はとても趣があるのだ。

「この写真、ダディンジュみたいですね」
ぼくが言うと
「うん、似てるだろ」
「イエス、心に沁みます」
思わずぼくは、英語と真面目腐った日本語を使ってしまった。
「ダディンジュではこれを使って瞑想したりお祈りしたり、するんだろ？」
清助おじいはそう言うと、パネル写真の額に掛かっている布の巾着から中身を取り出し、ぼくに手渡す。それはぼくらの国の僧侶の必需品である手のひらサイズの数珠（バディ）だった。
「そうです。お祈りは、このようにバディを握って……」
ぼくは数珠を手のひらに載せて、輪の中にある一〇個の木の珠を一つひとつ指で動かしながら実演して見せた。そして暫く繰り返しているうち、数珠の房の部分に書かれている文字が目に入った。口に出して読んでみる。
「……イン・ナイン？　へえー、亡くなった

ぼくの祖父の名前に似ています」
「え、本当？　まさか？　タントの名前に似てないけどね」
「ぼくらの国には姓はないので、一人ひとり名前が違うんです」
「そうなのか」
清助おじいは驚いた様子でぼくの手から数珠を受け取り、その文字に目に近づけた。
とその時、
「清助おじい、食事持って来ましたよ！」
玄関の方からトキ子さんの弾んだ声が聞こえた。ぼくは缶ビールをゴクンと一気に飲み干すと、数珠を覗き込んでいる清助おじいに会釈をしながら
「それじゃー、ぼくはこのへんで失礼します」
と言ってパネル写真から離れた。
その日以来、ぼくは仕事休みの日は決まって清助おじいの離れにいった。
「おとうさん、今週はフラワーネットを上げる作業だったよ」「今日は畑に肥料を撒いた。

枝葉、伸びるの早い。おとうさん」などと、日々の出来事を話す中で、清助おじいを日本の「おとうさん」と呼ぶ。ミャンマーでは他人でも親しくなれば「おとうさん」と呼ぶ習慣があるからだ。清助おじいはその都度、

「何一〇年ぶりかねぇー、おとうさんと呼ばれたのは……」

と言いながら顔をしわくちゃにさせ、目を細めるのだった。

秋が深まり、北風が吹き抜ける頃になった。後一ヶ月もすれば年の暮れ、ぼくの就職も半年が過ぎたことになる。

「今日は電灯設置の作業をするよ。来週から電照を始めようと思う。出荷までもう一息、頑張ろうね」

早朝、稲嶺さんが皆に号令をかけた。

畑の菊茎は長さが五〇から六〇センチにまで成長し、蕾も次第に膨らんできた。稲嶺さんによると、後一、二週間、手を掛けずにそ

のままの状態にしておくと完全に開花してしまうそうで、正月用の菊として東京や福岡に出荷するためには開花時期を遅らせる必要があるとのこと。そのため、夜中に二、三時間ほど電灯の光を当てて開花を調節する――抑制栽培方法つまり一般的に言われている電照を始めないといけないのだそうだ。

試運転を終え二、三日が経った日の夜、例年通り、形ばかりの点灯式をやることになった。

ぼくらは畑の隅に陣取り、かっぽう着を着たトキ子さんが作ってきた夜食のおにぎりをほおばりながら一斉に光が灯るその様子を今か今かと待っていた。

「毎年この時期になると、ワクワクするのよね」

トキ子さんの弾んだ声。

「清助おじいが見えないけど、どうしたんですか？　毎年写真撮りに来ているけど」

お茶を啜りながら従業員の一人が言う。

「清助おじいね。それどころじゃないのよ。最近、元気なくて、それに何だか急に変なこと言い出すし……痴呆が入ってきたのかしら」

トキ子さんの寂しげな表情。そういえば、最近、清助おじいの離れに行っても会話がちぐはぐで、気が付けばそのままソファーに寝ていることが多い。日増しに動きが鈍くなり元気がなくなってきているような気がしていた。

「さあー、点灯だ！　スタート！」

バラック小屋の方から稲嶺さんの大声が聞こえた。今まさに電源のスイッチが入れられようとしていた。

――パ、パッ、パッ――

暗闇の中、目の前から遠くに向かって、次々と電球に光が灯り、あ、と息を呑むほどに畑一面、太陽が燦々と注ぐ真昼の様相になった。

「やった、やった！」

全員が拍手。

ぼくは初めて見る電照菊の光景に立ちすくんでしまった。清助おじいの離れで見たパネル写真そのままだと思った。

「これからが本番。あと少しで出荷だ。さあー、忙しくなるぞー」

遠くから稲嶺さんの威勢のいい声が飛んできた。

「清助おじいが朝からいないんだけど、タント君知らないかね」

点灯式から一週間が経った日曜日の昼過ぎ、稲嶺さんがぼくの部屋に来て言った。

ここのところ、裸足で近所を歩き回ったり、遊んでいる子供をひ孫の亮と勘違いしたり、稲嶺さんやトキ子さんを急に怒鳴りつけたりと奇行が目立つようになり、そろそろ施設に入ってもらおうかと思っていた矢先だったという。

朝から家族はもとより友人や近所の人たちも一緒に清助おじいを探しており、今しが

た、警察に捜索願を出してきたとのことなのだ。

（徘徊が始まった……）

稲嶺さんのただならぬ素振りに、ぼくも急ぎ捜索に加わることにした。

ぼくは島の南側を中心に自転車を走らせ、清助おじいの立ち寄りそうな場所を探し回った。途中、もしやと思いサトウキビ畑や藪の中にも足を踏み入れてみたが無駄骨だった。その日は夜の九時過ぎまで皆で探し歩いたが「今日はご苦労さん。遅いからここは一先（ひとま）ず解散にしましょう。後は私たち家族だけで……」と、稲嶺さんから声がかかり、解散となった。

ぼくは稲嶺さんから頼まれて、今夜の菊畑の電照――夜一〇時から一二時までの二時間――の点灯を頼まれ、一人自転車で畑に向かった。金網の入り口を入り、バラック小屋に足を踏み入れようとした途端、暗闇の中、数メートル先の窪地から「ガサ、ガサ」と何や

ら物音がした。直ぐに踵(きびす)を返し、スマホの光を照らすと菊畑の中から人影が現れた。もしや？　と思い、目を凝らしながら近づくと、案の定、その人影は清助おじいだった。

昼間の警察の巡回ではいなかった筈の清助おじいが枝葉の陰に身を沈め、胡坐をかいていた。

「おとうさん！　大丈夫？」

ぼくはすぐに駆け寄り、声をかけた。

「……ああ、電照菊ね」

口をモグモグさせながらの言葉。ぼくは稲嶺さんにスマホで連絡した後、バラック小屋にある配電盤のスイッチを入れた。

暗闇の中からぼやけた光に溶け込んだ無数の菊の枝葉が立ち上がり、後方から百渡島の象徴であるタッチューの薄ぼけた姿が目の前に迫ってくる。次第に映像が露(あらわ)になってきた。

「ああ、ダ、ダディ、ダ……」

囁くような声。清助おじいはそう言いながら上空に向かって手を合わせる。感情を昂(たか)ぶ

らせながらも、その表情は実に穏やかに見える。

「おとうさん……ダディンジュに似てるね」

ぼくは清助おじいの耳元でそっと呟いた。

その日を境に、清助おじいは一日中ベッドから離れず、食も細くなり、急に衰弱していった。

正月向けの菊の出荷に追われ猫の手も借りたいほどの忙しさが続き、清助おじいの離れに行く機会も遠のいていた。正月が過ぎ、今度は彼岸向けの出荷の準備が始まろうとしていた矢先のムーチービーサー（春寒波）の吹く二月。清助おじいは風邪をこじらせ肺炎を誘発させると、あっけなくあの世に逝ってしまった。

聞くところによると、沖縄ではカジマヤーといって九十七歳の長寿の祝いが行われるけれど、清助おじいはその年に当たっていたそうなのだ。

葬儀は清助おじいの離れで行われることになり、ぼくも参列した。

仏間には祭壇が設けられ、読経の流れる中、多くの人がひっきりなしに弔問に来ていた。ぼくは棺おけの清助おじいの死顔に手を合わせた後、隣の大部屋に移り、ソファーに深々と座った。僅か一年弱の短い付き合いだったが懐かしさが頭を過ぎり、涙が止め処もなく流れた。くすみかけた壁に視線が向かい、あの電照菊のパネル写真に行き着くと

（ん？　何だろう？）

紙切れのようなものが額縁の隙間に挟まれているのに気が付いた。近づいてみると、それは茶封筒で手にとってみると表に「晃へそしてタントへ」と日本語で書かれていた。

（思いがけない清助おじいからの手紙……）

ぼくは手紙を手に、急ぎ仏間にいる稲嶺さんの下へと向かった。

晃へそしてタントへ

君たちがこの手紙を読む頃、私はどのような健康状態になっているか、まともにものを考えができているか自信がない。そこで記憶がまだ確かなうちに自分の思いを正直に書き綴っておこうと思う。

私には誰にも話せない忌まわしい過去がある。

消したくても消せない戦争の記憶。去る大戦で、私はビルマの「泰緬鉄道」で兵役についていた。その鉄道は一九四二年から一年かけてタイとビルマを結ぶ四一五キロを日本軍がインパール作戦を進めるために造ったもので、当時ビルマでは「死神鉄道（ティミンタマー・ヤッターラン）」と呼ばれた。イギリス人やオーストラリア人などの捕虜約十六万人が強制動員され、約四万人が栄養失調や事故、病気などで敷設工事中に死亡した。その中にはビルマ人やタイ人などの現地の人々もいた。

一九四二年の春、ムドンの町の近くに鉄道建設のためのキャンプ（基地）が作られ、戦

争捕虜とビルマ各地からの現地労働者総勢三千人余りが集められた。

私はそこで現地労働者の監視の任にあたっていた。監視の班長の下には、私と朝鮮と台湾からの召集兵の五人がおり、現地労働者を作業現場に誘導したり、必要品を配給したり、身の回りを点検したりと、彼らの行動を監視していた。

一ヶ月が経ち、私の下に一つ違いのビルマ人が連絡員として送られてきた。彼はムドン出身で結婚したばかりの若者だった。

名はイエ・イン・ナイン。仕事は私たち日本側からの命令を現地労働者に伝えることで、その仕事振りは実に協力的で、時には命の危険を顧みず自ら爆破作業にも従事してくれた。私は彼と身振り手振りで冗談を言い合える仲になり、作業を終えると近くの農家から彼がもらって来た芋や餅などを食べながらいろんな話をした。私は彼を出家した坊さんと言う意味で「ポンジーさん」、彼は私を「兄（アコー）さん」

とお互い愛称で呼び合うようになった。ポンジーさんは携帯用の数珠（バディ）を指で弄（もてあそ）びながら、田舎やお寺、家族のこと、特に数か月前に生まれた赤ん坊のことを自慢げに話した。私も故郷の百渡島の自然や風景、暮らしぶり、そして残してきた家族のことなどを話した。

しかし、そのような関係はそう長くは続かなかった。半年が経った頃、血相を変えた班長から「至急、奴を事務所に連れて来い！」との命を受け、私は事情を知らないポンジーさんを連行した。容疑は現地人に配給される食糧が捕虜へ横流しされていることと内部情報が漏えいしているスパイ容疑だった。かなりの劣悪な食料事情のために捕虜たちは痩せ細り、栄養失調や風土病で亡くなる人は後を絶たない状況だった。捕虜たちの悲惨な事情を見てポンジーさんが日本軍の倉庫から横流しをしたというのだ。

彼は「兄さん、兄さん！」と泣きながら私に助けを求めた。私は、ポンジーさんがする

わけがないと班長に訴えたが、逆にサンダル下駄でビンタをくらい、どうすることもできなかった。班長は密告があったの一点張りで、罵りながらポンジーさんを木刀で殴り、そして配下の私たち監視班にも暴行を強要した。私たちはポンジーさんを薄暗い部屋の中に連れて行き、取調べと称して拷問にかけた。その部屋には既に別の二名の連絡員が拷問を受けていた。

ポンジーさんの手足を針金で縛り、かわるがわる殴る蹴るの暴行：：ポンジーさんの顔は大きく腫れあがり、鼻は潰れ、大きく裂けた皮膚から鮮血が噴出。私は嘘でもいいから「自分がやった」と白状してくれと願いながら木刀を振り下ろしていたが、彼は最後まで無実を訴え続けた。

ポンジーさんが眼を尖鋭（せんえい）に開いたまま動かなくなった時、「全員殺せ！」と背後から班長の声がして、それを合図に私たち監視係は次々に「スパイめ！」と叫びながらポンジー

さんと二人の連絡員の胸を銃剣で刺した。一突きで死なずにのたうっている三人をこれでもかこれでもかと何度も刺した。全員が息絶えた時、私は我に返った。返り血を浴びた自身の顔を拭いながら部屋を見渡すと、辺りは血の海とかしていた。

ポンジーさんの姿――その痛ましい変貌に私は身のすくむような恐れを感じるとともに、自分が直接下した蛮行に成すすべなく立ち竦(すく)んでいた。三人の遺体は近くの山に穴を掘って埋めた。私たち日本兵による現地住民の虐殺だった。

それから私は夜な夜なポンジーさんの夢でうなされ、後悔と贖罪の念から生と死への狭間を行き来していた。しかも、横流しは日本軍の将校が小遣い稼ぎでやっていたということが判明し、ポンジーさんたちは無実だった。

インパール作戦で日本軍は壊滅的な打撃を受け、連合軍に負けてしまった。終戦後、

シンガポールで行われたいわゆるBC級戦犯軍事裁判で班長は多くの将校・兵士らとともに捕虜に対する虐待・虐殺の罪で絞首刑に処せられ、私たち監視係は命令に従うしかなかったとのことで住民虐殺の罪は不問にされ、私は沖縄に帰ることができた。

帰国する前、私はポンジーさんの家族に直接会って謝罪したいと思い、遺品の数珠を持ってムドンの町を訪ねた。でも、ムドンの町に着いた途端、足が鋼のように動かなくなってしまい、どうしても彼の実家に行くことができなかった。結局、私は自分の蛮行を晒(さら)し出す勇気がなかった。

町を重い足取りで歩いていると、目の前に円錐状のモニュメントがあった。線香(アモイダイ)の匂いに誘われるように入り口を入ると旧い木造の建物と石を敷き詰めた広場があり、その中央付近に仏塔(パヤー)が天空に反って建っていた。

その神々しい姿を一目見て、私は故郷百渡島のタッチューを思い出した。岩山の頂上か

ら四方の海を眺め、遠い世界に夢を馳せていた幼いころの自分の姿が蘇ってきた。

西に陽が傾き、月が出始めた頃、人々がいろんな花を手に持ち、仏塔に入って行く。ポンジーさんから聞いていたダディンジュが始まろうとしていた。人波に誘われるまま、私もその列に加わった。蒸せるような重苦しい空気を感じながら通路を通り、扉が開いてホールの中に入ると、一瞬にして心臓が止まり、あ、と息を呑んでしまった。「アラハン、アラハン（念仏）……」と唱える人々の声。目の前は闇と光の別世界。覆いかぶさる闇の中に、何百何千もの蝋燭が灯され、光が床一面に解放（ときはな）され揺れ動いていた。僧侶たちの読経がホール一杯に響き渡り、煌（きら）びやかな黄金色に染まった巨大な釈迦像が菊やバラやランなど色とりどりの花に囲まれ鎮座していた。艶（なまめ）かしい光のコントラストに照らされたその厳かな顔を見るうちに、ポンジーさんの悲しげな顔が浮かび、「兄さん、兄さん」と言う声が聞

こえ、激しく心臓を抉(えぐ)り取られるような思いになった。そして気が付くと、私は彼の数珠を握り締め、その場で声を上げて泣き崩れていた。

沖縄に帰ってみると、本島はもちろん周辺の離島も戦争の傷跡が生々しく残っていた。アメリカ軍との地上戦で一〇数万人の民間人が亡くなり、百渡島でも私の両親や親戚や友人たち多くの人たちがその犠牲になったと知った。そしてこともあろうに自国の兵隊にスパイ容疑で殺害された住民も多くいたと聞かされた。そのような体験を聞くたびに、戦争とはいえ、ビルマ戦線で多くの人々を殺害し、そして、あの泰緬鉄道でポンジーさんたち現地住民を虐殺した私の蛮行は、仮借なく罰せられるべきだったと思い知った。

私は菊を栽培して五〇年、毎年菊の開花時期になると、電照菊の光に映えるタッチューに向かってポンジーさんの数珠を手に合掌をする。ムドンの仏塔でのダディンジュの光景

を瞼に焼き付けながら……。

そんな中、タントがわが家に農業技能実習生としてやって来た。初めて会ったバーベキューパーティーの夜、君があのポンジーさんと同じ出身地のムドンだということを聞き正直ビックリした。そして数ヶ月後、君が写真パネルの側に掛けている数珠を手に取って「亡くなった祖父に似た名前……イン・ナイン」と言った時、私は頭をかち割られたような衝撃を受けた。

タントはポンジーさんの血縁者に違いない。いや、もしかしてポンジーさんが自慢げに話していた赤ん坊のその子供かもしれない！　そう思うと、遺品の数珠を渡し、過去の中に封印していたあの忌まわしい蛮行を洗いざらい吐き出し、君に詫びなくてはいけない、そう思うようになった。しかし、面と向かうと、君の顔がポンジーさんと重なってしまい、どうしても口に出すことができない。何度も何度も喉元まで言葉が出たが駄目だっ

た。このままだと、七〇年前にポンジーさんの家族に謝ることが出来ずにラドンの町を彷徨(さまよ)った時と同じではないか、次第に自分の体が弱ってくるのを感じながらも心は自責の念に駆られ、どうにかしなければと焦っていた。そこで考えに考えた末に、手紙で告白し断罪してもらうしかない、そう決心したんだ。――私がポンジーさんをリンチにかけ虐殺した事実は永遠に消えることはない。英霊に懺悔し、タントをはじめ遺族に対し衷心から謝罪したい。

日本の「おとうさん」より

大部屋のソファーに座り、手紙を読む稲嶺さんの手が小刻みに震え、言葉も時々涙で詰まっていた。

「清助おじいは自分の罪を墓場まで持っていくつもりだったけど、タント君に出会って告白しょうと決心したんだ。苦しかったろうなあー」

稲嶺さんは手紙を読み終えると、聞き手に回っていたぼくの肩をトントンと叩き、静かに仏間に戻っていった。

ぼくは呆然として聞いていた。

両親からは、祖父は若くして独立戦争で戦死したと聞かされていたが、それが沖縄の「おとうさん」に殺されたなんて、本当だとしたら……ショックで言葉が出ない。巾着の中から改めて遺品の数珠を取り出し、房の部分に書かれている文字を丁寧に見る。

「イエ・イン・ナイン」

はっきりと読み取れる。確かに、ぼくの祖父の名前だ。

時をへだてて、戦争の不条理さが心に重くのしかかって来た。泣きはらしたい気持ちを抑えるかのように、仏間から聞こえる読経に置き換わり、仏塔に流れる人々の祈りの声が響いてきた。ぼくは瞼の奥で電照菊に照らされたタッチューと仏塔のダディンジュの光景をダブらせる。闇に覆われた宇宙の果てで繰

り広げられる祈りの世界が今、始まろうとしていた。祖父の霊が時空を超え、生きとし生けるもの全てに溶け込んで成就される。

ぼくはソファーから立ち上がると、電照菊の写真パネルに向かって、深くお辞儀をし、そして、重い足取りで再び「おとうさん」の眠る祭壇に向かった。手の中の数珠の珠を一つひとつ指で押し動かしながら……。

完